

久米賞 佳作 受賞作品

真昼の音色

郡山ザベリオ学園中学校

『将来』

それはどこか遠い所にあつて、頃合いが来てから考えればいいものだと思つていた。

中学三年、六月。

とうとうその頃合いは来てしまったようだ。

鞆に押し込み、折れ目がついてしまったこの『進路希望調査票』が、それを静かに語つていた。

【一章】

うちの学校は、あらゆる機会において将来の『夢』や『希望』を生徒に要求してくる。何でも『なりたいゴールを意識させる事によって、生徒の主体性を育てる』方針らしい。

現にクラスの間も、大半はそれぞれの未来を見据えて進み出している。医者志望の奴は塾に、スポーツ選手志望の奴はスポーツクラブに、学校が終わった後、足繁く通っている。

だが生憎、俺にはそういった『夢』はない。

昔はそれらしいものがあつた。小さい頃は、学校で行事や自己紹介の度に『しょうらいのゆめ』を発表していた。しかし、その『夢』も二転三転し、今では目指すべきものが分からなく、いや、なくなつてしまった。ひたむきに走っている彼等の姿を見ると、羨ましさと共に妬ましさのような歯痒い感情に襲われる。その感情に耐え切れず、何より彼等にそれを見られる事が嫌で、俺は最近、自分から独りになるようになった。

ここもその一つ。校舎の北東の端にあるこの第二音楽室は、人気がなく、周りの時間から取り残されてしまったような独特の雰囲気漂わせていて、ここに来るとどうも心が落ち着いた。最近、他の休み時間よりいくらか長い昼休みの度にここに来て、雨音を聞きながら本を読む事が習慣になつてしまった。本を読んでいる間は、こんな厳しい現実を忘れていられる……だから多少寂しかろうがこれでいいんだ。

いつもと同じ、音楽室特有の分厚い鉄の扉から一番遠い窓際の席で、そんな事を考えていた。

【二章】

その日の昼休みも、いつもどおり第二音楽室に来ていた。

窓の外には、ついこの前まで空を覆っていた梅雨らしい濁った灰色の雲とは打って変わった、チューブから出したての絵の具のような明るい白色をした、力強い雲が浮かんでいた。

公道沿いの木々の梢にもすっきり葉が生い茂っている。

夏だ。

先月配られた『進路希望調査票』は、依然として真っ白なままだ。提出期限はとうに過ぎてしまったが、まあいいだろう。確か、この後にもう一度同じものを配る予定だったはずだ。

俺なんかはずっと悩んで提出しないているが、最悪『調査票』には志望高校を書くだけでもいい事になっている。自分のレベルと交通事情を

鑑みても、進学するとしたら、隣町にあるこの辺りではそこそこの通ったK高校になるだろう。

だが、将来就きたい職業によつては、高校選びから必要になってくる場合がある。別に就きたい職がある訳ではないが、「万が一」の可能性を否定できずに思い留まっている自分の優柔不断さには、本当に飽き飽きする。

『夢』とまでは行かなくても、何か、これから先を生きていく『目的』があれば……。

そう考えていた矢先だった。

いつもなら、自分以外は絶対に誰も入らないはずの昼下がりの音楽室の扉が、徐に開かれた。

キィ……という金属の擦れる音が、防音設備の行き届いた部屋に響いた。

金属扉を閉めた時の大きな音が鳴らないように手を添え、ゆっくりと扉を閉めた人影は、俺の姿を認めると「あつ……」と短く声を漏らした。

「あの……ピアノ、使つていいですか？」

入ってきたのは長髪で活発そうな雰囲気の子だった。名札の色で同級生だと分かったが、知り合いではなかった。

「ああ……どうぞ。」

当然、断る由もない。こちらは好きでここに居座っている訳だから、誰かが来る事を止める事はできないし、そのつもりもない。

彼女はほつ、とこちらからでも分かる程に安堵した表情を浮かべ、小走りピアノに向かった。

しかし、何故今日ここに来たのだろう。ピアノを弾きたいのなら、これまでにも十分機会はあったはずだ。

そんな疑問をよそに彼女はピアノの椅子に腰を下ろすと、軽く目を閉じ、両手を鍵盤の上にスツ、と置いた。

その瞬間、雰囲気が変わった。

彼女の全神経がピアノに向けられている事が肌で分かった。先刻までの疑問も頭から吹き飛び、緊張に似た何か音楽室を駆け抜けた。

彼女はゆつくりと息を吐いた。そして、吸うと同時に両手を軽く上げる。

ぎりぎりまで盛り上がった空気の中で始まった旋律には聞き覚えがあった。ドビュッシーの『月の光』。誰でも一度は聞いた事がある有名な曲だ。しかし……彼女の演奏は今までに聞いてきたどの演奏よりも美しかった。

美しく澄んだ旋律から想像されるのは、曲名通りの月。涼しい夜の空で、静かに輝いている。

『目的』を見つけられずにただ迷っている自分を残酷なまでに照らし出す、まるで彼等のような太陽と違い、この月の光は僕を優しく包んでくれる……そんな気がした。

俺は、昼休みが終わるまで彼女の演奏に聞き入ってしまった。

曲を弾き終えた彼女は、満足そうに笑みを浮かべると「あつ！もう時間だ」と言つて立ち上がり、こちらに軽くお辞儀をしてから出て行ってしまった。

結局名前を聞けなかったな……だがまあ、いいだろう。一期一会という言葉がある通り、出会いの数は無限大だ。いちいち覚えていたらきりがない。

しかし……やはり今日の昼休みは良い時間だった、という思いは、俺の心に深く残っていた。

翌日。昼休みが来ると、俺はいつものように人通りが少ない階段を使つて、第二音楽室へ向かった。いつも通りの席に腰掛け、ふとピアノの方

を見る。

昨日の演奏は時間でいうと五分程度だったが、思い返してみると一瞬だったような、しかし聞いていた間は、この心地良い時間が永遠に続くような、不思議な感覚がした。

もう一度聞きたかったな……などという淡い妄想に浸りながら本のページをめくっていた時、彼女が現れた。

昨日と同じようにふっ、と現れた彼女は、

「ピアノ借りていいですか？」

と、昨日と同じような問いを律儀に投げかけてきた。

「いちいち聞かなくても大丈夫です。俺も、無許可でここにいるんで。」

俺がそういうと、彼女はどう捉えたのか、

「では……失礼します。」

とうやうやしくお辞儀をしてから進んできた。

いや、だから違うんだけどなあ……

彼女はピアノの椅子に座り、また昨日のように彼女だけの世界に入ってしまった。

指が舞う。

今日弾いている曲は、昨日の『月の光』ではなかった。俺の知らない曲だ。単調なメロディーだったが運指が難しそうで、何かの練習曲だと思った。

しかしそんな曲でも、彼女が弾くとそこに物語が生まれ、目を閉じると情景が浮かんでくるようだった。森の奥にひっそりと佇む池。爽やかな風が湖面にさざ波を立て、湖畔の木々の枝葉では小鳥たちが鳴き交わす……

俺は読んでいた本を閉じ、軽く腕を組むと彼女が描く物語の世界に溶けていった……

しばらくして、演奏が終わった。今回の曲は昨日のよりも少し短かったようだ。しかし、やはり聞いている間は時間の進みが遅くなって、ゆったりと包み込まれているようだった。長く息を吐いて目を開くと、彼女はピアノの横からこちらを見つめていた。

「あの……私のピアノ、どうでしたか？」

不安そうにしているが、返す答えは決まっている。

「とても上手かったよ、ありがとう。」

彼女はこれを聞くと花が咲いたように顔を輝かせ、「ありがとうございます！」と大きく頭を下げた。

いちいちリアクションが大きいな……

しかし、特に何かをした訳ではないが、誰かに感謝された事は少しだけ嬉しかった。

さあ、そろそろ時間だ。五時限目が始まってしまおう。俺が本を手に取り扉へ向かうとすると、彼女が呼び止めた。

「あの……明日もここ使っていいですか？」

一瞬俺は驚いたが、答えは前と同じだ。

「ああ。好きに使ってくれ。それと……」

一度間を取り強調する。

「何度も言うが、いちいち許可取らなくていいんだからな。」

彼女は俺の意思を酌んだのか、今度は「はい。」とだけ答えると小さく頷いた。

その後、音楽室を後にして階段を上っていた俺は、意識した訳ではなかったが

「また明日も聞けるのか……」

と呟いていた。

【三章】

その日以来、彼女は昼休みが来る度に第二音楽室を訪れるようになった。

彼女は二日目以降、俺にいちいちピアノの使用許可を取らないようになった。いつも、俺より少し遅れて音楽室に入ってきて、軽く頭を下げてからピアノを引き出す。

俺たちはお互いに何も話さなかったが、彼女は音楽を通して、俺に言葉よりも多くの事を語っていた。

演奏する曲は日によって異なり、たまに以前弾いた曲をもう一度演奏する事もあった。演奏する曲は、年代がかなりばらけていたが、どれもクラシックだった。

俺は元々、人目を憚ってこの音楽室に来ていたはずだったが、彼女だけは気にならなかった。彼女が弾くピアノを聞いている間は、自分を取り囲む絶望的なこの状況を忘れる事ができた。

彼女が初めてここを訪れてから二週間程度経ったある日。その日は演奏がいつもより三分程早く終わった。話しかけるならここしかないと思いい、思い切つて声をかけるみる。

「あの……あなたは……」

駄目だ。女子に名前を聞くなんてシチュエーション、久しぶりすぎて言葉にならない。

それでも、彼女は俺の意図を察してくれたようだ。軽く微笑みちゃんと返してくれた。

「三組の木崎なずなです。あなたは？」

「ああ……六組の筒井だ。」

なんとか答えられたが、女子に名前を聞かれて名前だけを返すのは、いささか無愛想すぎるだろうか。まあ、話せる事なんてないし、聞かれた事には返したからいいだろう。

しかし、これで納得した。三組の人間だから知らなかったのか。うちの学年は合計六クラスあり、六つの教室が横一列に並んでいる。このうち二組と三組の間に階段と多目的ホールがあり、両側でそれぞれ別のまとまりを作っている。ただでさえ疎遠な両グループだが、六組はその中でも一、二組から最も遠い。面識がなくて当然だ。

俺があまりに何も喋らないせいで、俺たちの間には何だか気まずい空気が流れた。

彼女はしばらく黙っていたが、耐えかねたように話しかけてきた。

「筒井君はどうしてここに毎日いるの？」

ぐっ。俺の一番痛い所を突いてきやがった。

「……まあ、なんとなく？」

純粋そうな眼差しこちらを見つめてくる彼女に、俺のねじ曲った本心など言えるはずもなかった。それに、彼女以外にも言った事はない。もしこんなものを知ってしまったら、人々は俺から離れていってしまうだろう。友達付き合いは少ない方だが、その事には少し抵抗があった。

ここで言葉を切つてしまってもいいが、それではさつきと同じだ。それに何となく、この気持ちは伝えた方がいいと思つた。

「それに、木崎さんの弾くピアノを聞いていたかったから……」

これ以上言葉が思い浮かばず、語尾を濁す。どことなく、気恥ずかしい気分だった。

だが、彼女はこの一言がともうれしかったようだった。ふっ、と笑うところ言つた。

「……よかった。ありがとう。」

【四章】

お互いをすっかり認識した為だろうか、その日から俺たちは演奏の合間に少し喋るようになった。初対面の時に感じたイメージ通り彼女は活

発で、話している時間がとても楽しそうだった。話す内容は他愛のないものばかりだ。初めは彼女の弾いた曲の感想から、互いのクラスの事、中三になって激増した宿題の愚痴など、今ではかなり気さくに話せる。

元々人付き合いが少なく、流行話にめっぽう弱い為、最初は身構えていたが、意外にも彼女もその口だった。その代わり、俺たちは音楽、とりわけクラシックについてよく話した。

今はもう辞めてしまったが、小学校を卒業するまでピアノを習っていた、今でも趣味で聞いていた事が功を奏した。世間的にはマイナーな曲でも彼女は詳しく知っていて、感じたイメージ、作曲された背景、更には細かい技法についてまで、俺たちはとことん語り合えた。

「ねえ、フランツ・リストの『愛の夢』ってあるでしょ？」

「ああ、特に第三番が有名だな。」

「ええ。その第三番ってドラマチックに弾くイメージあるじゃない？でも、それ違うんだって。」

「え！じゃあどう弾くんだよ。『愛』って言ったら情熱的に普通は弾くだろう。」

「それがリストは、『愛なんてたいがい長くは続かないから、軽はずみな感じで弾いて』って言ってるの。それに、この曲は基になっている詩自体が、『愛情を裏返しにした微笑ましいユーモア』っていうシチュエーションらしいし。」

「まじか……でも、表現の仕方は自由だし、別に情熱的でもいいんじゃないか？」

「それもそうね。」

そうしてクスッと笑いあう。

短い時間だが、こうして話していると楽しい。

いつの間にか彼女は、俺にとって学校で一番話しやすい人間になっていた。

夏休みを挟んでしばらく間が空いたが、二学期もそんな感じの日々が続いていった。

「お前さ、最近なんか元気だよな。」

昼休みではない、授業合間の十分休憩の事だった。隣の席の三村が唐突に話しかけてきた。三村は、俺がまともにコミュニケーションを取れる数少ない人間の一人だった。

「そうか？何も変わってないと思うが……」

だが、三村は自信満々といった様子だ。

「いや、変わったね。前まで、そうだな……梅雨の頃が一番酷かったかな。何というか、何かを恨んでいるような、諦めているような……よく分からないが、とにかくいつにも増して暗かったな。でも最近はなんか明るくなったんだな。どうした筒井？何かいい事でもあったか？」

そうか……そこまで暗くなっていたか。確かに、まだ彼等に対する羨望のような気持ちはあったが、前よりはかなりましになった。

それにしても『いい事』か……。心当たりは一つしかなかった。意識してはいなかったが、案外俺は彼女に助けられていたのかもしれない。

【五章】

日暮れが早くなってきた。少し前まで狂ったように鳴いていた蝉たちはどこかに消えてしまい、今は草木が風に揺れる音と虫の音だけが残っている。夏の頃のような活発さはもうなく、時折吹き抜ける冷たい風が、冬が近づいているという現実を俺に思い知らせる。

今日の帰りのホームルームで、今年度二枚目の『進路希望調査票』が配られた。名目上、願書の提出が最終的な進学先の決定だが、ほとんどの場合、今回配られた『進路希望調査票』の第一、第二志望校がそのまま願書の提出先になるので、実質これが最終決定だと言っていいたいだろう。

ここ最近はずっかり忘れていた、いや、忘れた気になっていたが、現実はずっかりそこにあった。しかも今回は本当に逃げ場がない。答えが決まっていようがないからだが、今回の『進路希望調査票』は今週末までには必ず出さなければならぬ。

もう、目を背ける事はできない。考えなければ。俺は、止めていた思考を再開する。

結局の所高校は、将来への通過点の一つに過ぎない。つまり、選ぶ基準は将来の夢を達成するにあたり必要かどうかだ。ああ、駄目だ。俺にはその『夢』がない。いろいろな職業について調べた。でもその全てにおいて、自分がその職に就いている姿が全く想像できなかった。そもそも、何故そこまでして働かなければならないのか俺には理解ができなかった。生活する為に、金を稼ぐ為に働くという事は分かっている。だがそれだけだったら、集中力のない俺は途中で力尽きてしまうまいだろう。しかし、それ以上何も思い浮かばない。

焦燥だけが募っていくようだった。綺麗事で取り繕おうとしても駄目だった。現実がそれらの全てを優しく否定していく。

結局、その日の内に答えを出す事は無理だった。

次の日も、答えは全く思い浮かばなかった。結局、『何の為に』という所で堂々巡りを繰り返している。授業には身が入らず、ずっと上の空だった。

そうこうしている内に午前中の授業は終了、昼休みがやって来た。活発な男子は体育館に、静かな女子は自分の机にそれぞれ向かい出し、思い思いの時間を過ごし始める。そんな中、意識していた訳ではなかったが、俺の足は第二音楽室へと向かっていた。考え過ぎて、頭はもう回っていない。ただいつもの習慣だけをなぞって俺は音楽室に足を踏み入れ、定位置に座った。俯いたまま長いため息を吐く。

本当に、どうすればいいのだろうか……

その時、いつも通り俺より少し遅れて彼女がやってきた。彼女は、こちらの様子を見て何か感じたのか、近寄ってきて

「大丈夫？辛そうだよ？」

と聞いてきた。

俺はこの事、『自分の将来の事』について人に話した事がなかった。でも何故だか、彼女にすら話せる気がした。

働かない頭を必死に回して、言葉を捻り出す。

「木崎さん……俺には『夢』がないんだ。そもそも話、全てをする『目的』がない。やりたい事、なりたい自分、目指したいもの、何も無い。」

彼女は俺の向かいの席に座り、こちらを見ている。俺は俯いた顔を上げて、彼女の瞳を見つめた。

「なあ……俺は、何の為に生きていけばいいんだ？」

心からの問いだった。彼女は「うーん……」と困ったように顎に手を当てると、「答えにならないかもしれないけど……」と前置きをし、切り出した。

「ちよつと私の話をするけど、実は私、東京の音楽高校目指してるの。知ってた？」

知らなかったが、驚きはしなかった。彼女の腕なら東京でも通用するだろうし、彼女がピアノを弾く時の様には、プロのそれに近いものがあった。

「小さい頃からレッスンを沢山受けて、学校のピアノでもたまに練習してた。そうして頑張った分だけ技術は伸びたけど、何かがずっと足りなかった。先生や親は十分褒めてくれてくれたけど。」

彼女は自嘲するように言った。

「可笑しい話よね。でも、やっぱり何か違って、私はピアノを弾きたくなった。これが去年くらいの話。」

彼女は、軽く閉じていた目を開き、こちらに向き直った。

「で、ある時。特に理由はなかったけど、久しぶりにピアノ弾いてかゝって思つて音楽室に来てみたら先客がいたの。でも、一度目が合つて引き返すのは不謹慎だし、彼もピアノを使う素振りがなかったから、折角だし弾かせてもらう事にした。……弾き始める前はすごく緊張した。人前、しかも初対面の人の前で弾くのは久しぶりだったしね。でも、聞いてもらうからには絶対良いものにした、と思つた。」

ああ、ここという『彼』というのは……

「それで、一曲弾いてみたら、とても上手くできたの。そしてその時は、いつも感じていたあの物足りなさは感じられなかった。代わりに弾き終えた時に感じたのは、心の底からの開放感。初めは何故だか分からなかった。だから次の日も来てみたの。そしてまた彼がいるのね！ずっとここにいるから、やっぱりここは彼だけの場所なのかな、と思つて尋ねてみたらサラッと許してくれて。で、その日も気に入っている曲を一つ弾いてみたの。」

彼女は楽しそうに話を続けた。

「弾いている途中にふと氣になつて彼の方を見てみたのね。そして彼女は、目を閉じ、肩の力を抜いて、あまりに心地良さそうに聞き入つてて……」

ああ、恥ずかしい。俺とした事が、そんな痴態を見られていたなんて……

「それを見た時、私、すごく嬉しかった。自分のピアノをこんな風に聞いてくれる人がいるんだ、つて。それからは昼休みの度に、私は音楽室に行くようになった。そこにはいつも必ず彼がいて、私のピアノを気持ち良さそうに聞いてくれる。私はその時、必ず最高のパフォーマンスができるの。そして何となく分かった。今までの私に足りなかったもの。ここに来ると良い演奏ができる理由。」

彼女は、自分の両の掌を見た。

「今まで私は、何も考えず、ただ自分の為にピアノを弾いてきた。『間違えたくない』とか『他人より上手になりたい』とかね。確かにその気持ちも大事だとは思ふ。だけど私はここに来て、『誰かの為に』ピアノを弾いた方が、楽しく、上手く弾ける事を知つた。ピアノを弾く楽しさをもう一度確認して、これから先に進む力をもらった。」

彼女は拳を握りしめ、今まで見た中で一番晴れやかに笑つた。

「これが私の『進む理由』。だから、私から筒井君にアドバイスできる事は一つだけ。」

彼女は俺の右手を取り、そつと握つた。

「前へ進む事に、特別な理由や大義は別に必要ない。もしあなたが『目的』が分からず困っているのなら、単純に一言……『誰かの為に』。この言葉を思い出してみて。そんな簡単な理由でも、案外頑張れる……かもしれないから。」

彼女が話し終えて言葉を切つた後、音楽室には束の間、何も聞こえない静かな時間が流れた。

ああ、思えば確かにそうだった。俺は今まで、あらゆる物事の判断基準を自分にとってそれが利益になるか否か、としか考えてこなかった。そこに他者の姿はなく、それ故に俺はいつも独りだった。

今回俺が自分の将来について思い悩んでいたのは、それが慢性的に表面化した事が原因だろう。確かに、実際この世の中には、個々人が己の利益を追求した結果回っている物事も多くあるだろう。だが、人間は集団で生活するものである以上、完全に自分本位で生きていく事は不可能に近い。そもそも『働く』という行為自体が、人間が独りでは生きていけないという事の証明だ。働くことによつて生産されるほとんどの物は、自分ではなく、誰か他の人間によつて消費される。結果として自分の手元には報酬として金銭が渡されるが、本来『労働』とは、『誰かの為に』

行われるものだろう。俺はそこを履き違えていた。だから俺は、自分が満足する為に『目的』何てものを求めてきたのだろう。

ずっと探してきた足りなかったピースが、コトリとはまったようだった。今まで感じてきた違和感や疎外感の代わりに、ほんのりと温かい納得感が心に広がった。

彼女は、俺の表情を見て取って何かを察したのか、ピアノの方に向かい、
「時間がないから短い曲しか弾けないや。ごめんね。」
と念を押してから弾き始めた。

その曲には、聞き覚え以上の馴染みがあった。曲名までは思い出せないが、小学五年の頃に弾いていたギロックの叙情小曲集の内のどれかだ。肩書き通り短く、難易度も高くない曲だが、今の俺の心には深く響いた。静かに始まり、流れの中で大きく盛り上がる。荘嚴な旋律は終りに近づくとつれて小さくなり、最後は想像の余地を残したまま、空気に溶けていった。明るい曲ではなかった。だが俺には何故だか、彼女がこの曲を通して彼女なりに俺を応援してくれているように感じられた。

演奏を終えて立ち上がった彼女は、こちらに軽く微笑むと「じゃあ、また明日ね。」と言って音楽室を立ち去っていった。後に残された俺は一人立ち竦み、彼女が出て行った扉の方をただ眺めていた。このレベルの曲でもここまで心に響く演奏ができる点からして、やはり彼女は音楽の道に進むべくして進む人間なのだろう。だが、そこまでの実力を持ちながら、彼女は俺みたいな人間を気にかけてくれた。何か返したい。どんな形でもいいから彼女に、俺を大切な事に気づかせてくれた恩を返したい。そう考えるまでに時間はかからなかった。

……ああ。そうか。

つまり、俺の『目的』は……

【終章】

「筒井。じゃあ、志望校はK高校でいいんだな？」

「はい。」

「分かった。しかしなあ……この前まであんなに悩んでいたのに、急にどうした？何かなりたい職でも見つかったか？」

「いいえ。でも、やりたい事ができました。だから、もう大丈夫です。」

「……そうか。あまり詳しくは聞かないでおくが、頑張れよ。」

担任はそう言うと、言葉を切った。

進路指導室の扉を閉め、長く息を吐く。担任には驚かれましたが、まあ無理はない。なんせ、俺もびつくりだ。ここまで真剣に何かをやりたいと思った事は今までなかったし、これからあるとも思わなかった。

昨日の昼休み、彼女の演奏を聞き終わった後、不意に思った。『彼女のように夢へと進む人を、支えたい。』と。

俺には彼女のような才能も、自分自身がなりたいと思うものもない。ただあの瞬間、自分ではなくとも、誰か他の人が夢を叶える事を助けたいと、心の底から思った。

今までの音楽室の片隅で考える中で、いろいろな事を否定してきた。だが、この気持ちだけは否定できない。溢れ出る情熱、希望がそれを裏付けていた。

人から見たら奇妙かもしれない。そもそも『支える』と言ったって、具体的に何をするのか曖昧だ。それでも、俺にとっては立派な『目的』だった。

開いた窓から流れ込んできた秋風が、頬をくすぐる。誰に何と言われようが、この先に何があるかが、突き進んでいける気がする。

そんな事を考えている内に、もう第二音楽室に着いてしまった。今日

は、昼休みの初めに担任と話してきた為少し遅れてしまったが、部屋の中からはいつも通りピアノの音が聞こえる。

今日はその音色が、何故だかいつもより更に美しく聞こえた。

『目的』を手に入れた今、もう扉を開ける事は怖くはなかった。

(指導教諭／西山秀典)

《作品の意図》

この作品では、中学生なら誰でも一度は考える『将来』や『夢』、『目的』等というものをテーマとした。

『夢』など無かった。欲しくもなかった。そんな自分が嫌いだった。

これは、そんな卑屈な少年の物語。

読んで頂けると幸いです。

《作品の寸評》

進路決定を目前に控え、具体的な夢や目標がないという悩みをもつ主人公が、女生徒との出会いをおして、自分の足りなかったものに気づき成長していく物語である。作者は等身大の主人公に普遍的な中学三年生の悩みを投影したといえる。将来どう生きていくのか、何のために働くのかといった根源的な問いを進路選択という問題にからめ巧にテーマ化している。この小説のよさは明確なテーマだけではない。悩める主人公の心理描写をはじめ、季節を表す情景描写、さらには女子生徒がピアノを弾く場面の緊張感や空気感までをも表現する。この確かな語彙に裏打ちされた優れた描写力が、作品に彩りを添え、読ませる力を発揮している。

(審査員／三輪晶子)